

連載コラム

みずき野と その周辺の 植物と昆虫

第15回 帰化植物たち



本吉總男

みずき野とその周辺の植物と昆虫

(15) 帰化植物たち

帰化植物とは、外国の原産種が日本に持ち込まれ、野生化した植物を言います。何らかの目的で日本に輸入され、栽培されていたものが、栽培地から逸出して野生化することが多く、また偶然外国からの荷物について来た種子が地面に落ちて発芽し、帰化することもあります。外来植物の帰化は江戸時代にもかなりありましたが、明治以降欧米との通商が盛んになり、帰化植物は急速に増えました。

全国農村教育協会発行の「日本帰化植物写真図鑑」（２００１）および「日本帰化植物写真図鑑 第２巻」（２０１０）を見ますと、両編で１１００種の帰化植物が記載されています。この図鑑には沖縄のみに帰化したものも含まれますが、２０１０年までに発見された帰化植物はほとんどこの両巻に含まれていると考えられています。

これらの帰化植物のうち、みずき野周辺で私が見ている種は約１３０種ですが、見落としているものや見分けにくい類似のものもあると思われますので、おそらくもっと多くの帰化種が存在すると思われます。

そんなに多くの帰化植物を取り上げることはできませんので、特に目立つものや話題として興味あるものを選んで載せてみることにしました。

(1) ハルジオンとヒメジョオン

両種とも北アメリカ原産。日本でも今ではもっともよく知られている植物です。４月から５月に見られるのはたいていハルジオン、６月下旬以降９月頃まで見られるのはヒメジョオンです。しかし６月上・中旬には両種とも咲いていて、その特徴を知らないで区別できません。

ハルジオンは漢字で春紫苑ですが、ヒメジョオンは姫女苑。ヒメシオン（姫紫苑）という在来種が存在し、それと区別するために、この帰化植物はヒメジョオンと命名されたものと思われます。ハルジオンは大正時代１９２０年頃に関東に帰化し、いまは全国に広がっています。ヒメジョオンは江戸末期に鑑賞用に導入され、明治年間に各地に帰化したようです。

ハルジオンとヒメジョオンは外観は似ていますが、識別は簡単です。ハルジオンの茎を切ってみると、中が中空になっており、ヒメジョオンの茎は中がつまっています。また、ハルジオンの葉の基部は茎を抱いていますが、ヒメジョオンの葉は茎を抱いていません。

ハルジオンとヒメジョオンの生態的な違いはハルジオンが多年草であり、ヒメジョオンが越年草であることです。ヒメジョオンは受精せずに種子をつくりますが、その仕組みは複雑なので、ここでは説明を省略します。



ハルジオン
5月中旬
本町地区



ヒメジョオン
6月上旬
本町地区

マツバウンランは地中海地方原産の越年草です。昭和16年(1941)に京都で見つかった植物ですが、私がこの花を初めて見たのは、平成初期、みずき野から岡山に引っ越して、山陽本線に沿って散歩していたときでした。この花が線路に沿ってずっと並び咲いていたのが美しく、印象的でした。今はごく普通にみずき野周辺にも見られます。



マツバウンラン
4月下旬
本町地区

ナガミヒナゲシ(地中海地方原産)は何時初めて見たかは覚えていませんが、平成12年(2000)みずき野に戻ってからだったと思います。昭和36年(1961)に東京で発見され、のち各地に広がり、市街地ではごく普通の帰化植物になりました。みずき野でも数年前には数多くみられましたが、この2、3年、少なくなったような気がします。



ナガミヒナゲシ
4月下旬
5丁目

(3) ユウゲショウ

熱帯アフリカ原産のツキミソウの仲間で、明治年間に観賞用に導入されたものが、逸出して野生化しました。みずき野周辺では、第2調整池に定着しており、初夏から夏によく見られます。ユウゲショウは通常赤い花をつけますが、第2調整池には、赤花から突然変異で生じたと思われる白花の個体が混じっています。



ユウゲショウ

上：普通の花

5月中旬 第2調整池

下：白花変異体

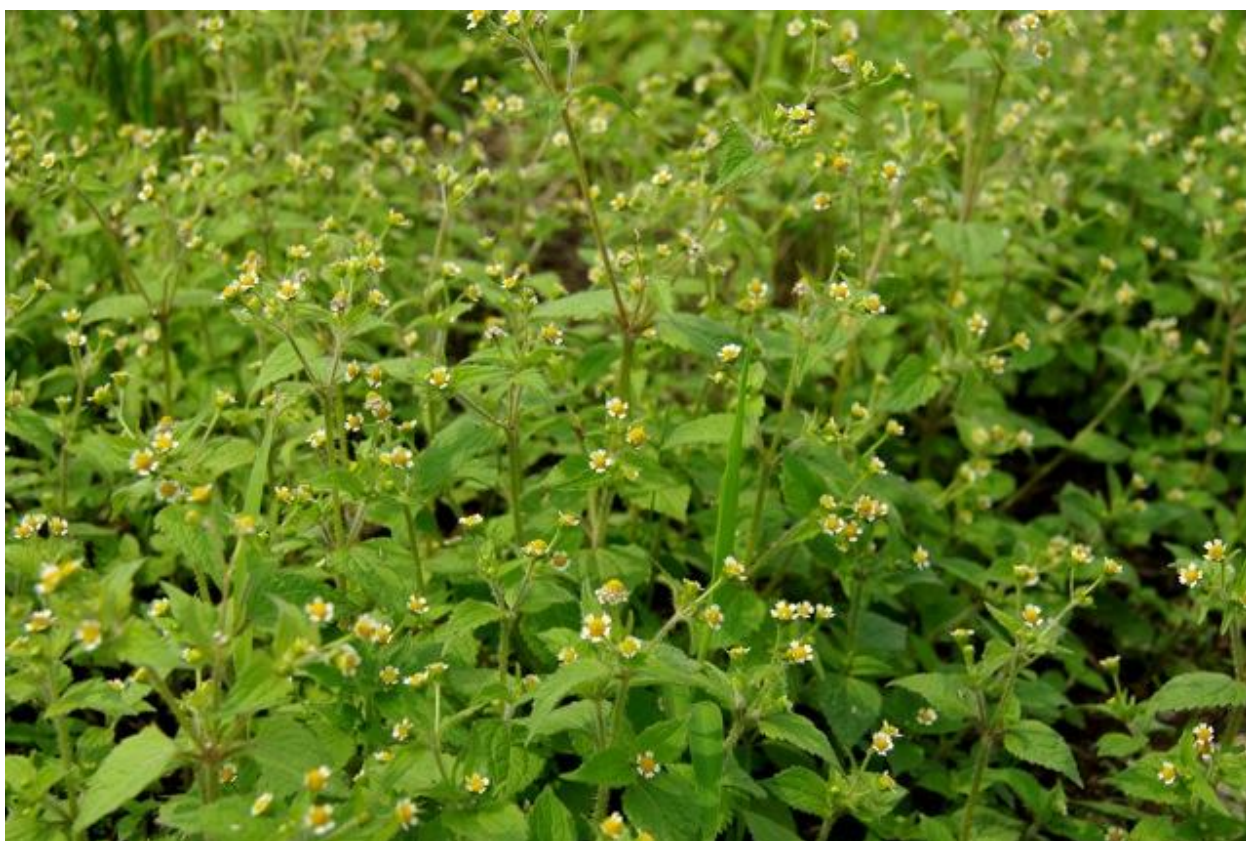
5月中旬 第2調整池

(4) ハキダメギクとワルナスビ

ハキダメギクはキク科、ワルナスビはナス科と、類縁関係はほとんどないのですが、両種とも牧野富太郎が命名し、その名の由来がおもしろいので、並べてみました。

ハキダメギクは熱帯アメリカの原産で、一年草。大正年間に侵入したとされています。花期は夏から秋。ワルナスビは北アメリカの原産で、明治初年千葉県三里塚の牧場に侵入し、オニナスビ、オニクサなどとよばれていたようです。花期は夏。

ハキダメギクは大正時代、牧野富太郎が東京世田谷の経堂にあった掃き溜めで発見し、ハキダメギクと命名しました。このハキダメギクについて、かつて朝日新聞に連載された「花おりおり」というコラムで、湯浅浩史は「花の名も時代を反映する。かつて身近に『掃きだめ』があった。生活のゴミを掃き捨てる場所として機能していたのである」と述べています。そう言われると、ハキダメギクという名も今は失われた昔の町の様子が思い出され、懐かしさすらも感じます。しかし一般には、可憐な花なのにあまりにも気の毒な名前だと同情されているようです。



ハキダメギク
6月中旬 貝塚地区

ワルナスビは「悪茄子」の意味です。牧野富太郎は「植物一日一題」（ちくま学芸文庫）の中で、その命名に至った顛末を述べています。それによると、三里塚に植物採集に行ったとき、この植物を珍しいと思って採集し、東京の大泉にある自宅の圃場に植えたそうです。それからが大変。年を経て地下茎が地中深く、四方に広がり、抜いても抜いても根絶しきれず、隣りの畑にまで侵入するようになってしまったとのこと。葉には鋭いとげが生えていますから、繁茂したら始末に負えない植物です。ワルナスビという名には命名者の恨みが込められているように感じます。



ワルナスビ
6月下旬
本町地区

(5) ヒメヒオウギズイセンとキショウブ

ヒメヒオウギズイセンは南アフリカ原産ですが、ヨーロッパで花卉として改良されたものが、各国で栽培されるようになり、日本にも明治年間に導入され、一部野生化しています。本来は湿地を好むらしく、みずき野周辺にも湿地に見られます。

ヒメヒオウギズイセン
7月上旬
本町地区





キショウブは湿地や水田の中に見られます。ヨーロッパから中近東にかけて原産し、日本のハナショウブの近似種です。日本のハナショウブには本来黄色系がなかったのですが、キショウブをハナショウブとの交配に使うことによって、現在では黄色いハナショウブの品種がいくつか作られています。しかし、現在は在来のアヤメの仲間との競合や

交雑が心配され、環境省によって要注意外来生物に指定されています。

(6) ダンドボロギクとベニバナボロギク

ダンドボロギクは北アメリカ原産の一年草です。花は8月～10月に見られます。キク科ですが花の周辺を飾る舌状花がないので、花の美しさは感じられませんが、思わぬ場所、たとえばわが家の庭に突然生えてきて、驚かせます。ダンドボロギクとい

う名は、昭和8年(1933)愛知県段戸山で発見されたことから付けられた名です。



左：ダンドボロギク 9月下旬 貝塚地区

右：ベニバナボロギク 11月上旬 貝塚地区

ベニバナボロギクはアフリカ原産の一年草です。花は8月～10月にみられます。昭和25年(1950)に侵入が気づかれ、その後各地に広がりました。ダンドボロギクによく似ていますが、花が下向きに咲き、花の先端が紅色なので簡単に区別できます。

草本の帰化植物の中では、大きくて目立つ植物です。キクイモは北アメリカ原産の多年草で、日本には江戸末期に渡来し、明治以降も塊茎を食用にするために輸入されました。キクイモの塊茎は澱粉をもたず、そのかわりに多糖類のイヌリンを含んでいます。イヌリンは澱粉と比較するとエネルギーが低く、ダイエット食品とされています。私は薄切りにしてサラダとして食べますが、さくさくした歯ごたえが好きです。



キクイモ 9月上旬 本町地区

(8) セイタカアワダチソウ

セイタカアワダチソウは北アメリカ原産の多年草で、明治年間に観賞用に導入されたそうですが、野生化して空地や野原や河原に大群落をつくるようになったのは第二次大戦後のこと。戦前までの日本の秋の風景を一変させてしまった植物です。地を覆う一面の黄色は今でも戦後のシンボルのように憶えています。

セイタカアワダチソウは地下茎で繁殖し、地中に他の植物の種子の発芽を阻害する物質を出します。何らかの物質を放出して他の植物の生育に影響を及ぼす作用をアレロパシー (allelopathy) とよびますが、セイタカアワダチソウの発芽阻害作用もアレロパシーの一種です。セイタカアワダチソウのこの発芽阻害物質は他の植物ど

ころか、自身の種子の発芽までも抑えてしまいます。

セイトカアワダチソウが勢力を拡大しつつあった頃、植物学者の中には、忌地（いやじ）現象によって、その繁殖はいずれ衰えるときがくると予測する人もおりました。たしかに猛威を振るった頃と比べると、セイトカアワダチソウも大分おとなしくなっていて、他の植物との共存も見られるようになりました。セイトカアワダチソウの忌地現象に関しては、自身の成長に必要な土中の成分を自らその生育地から過剰に奪ってしまったことや、自らが出した発芽阻害物質が子や孫となるはずの種子の発芽を抑えてしまったことなどがこの植物の衰退の原因と思われます。

なお、セイトカアワダチソウの花は虫媒花で、花粉アレルギーを起こさせることはほとんどないと考えられます。夏から秋に花粉アレルギーを起こさせる植物としては、風媒花を咲かせる帰化植物のブタクサやオオブタクサ（クワモドキ）があります。



セイトカアワダチソウ 10月下旬 本町地区

シロツメクサはヨーロッパ原産の多年草で、世界中で飼料として栽培され、また野生化しています。シロツメクサは漢字で白詰草。オランダからガラス器などを送るとき花を詰め物として使ったことに由来する名です。

シロツメクサは普通クローバーとよび、また単にツメクサとよぶことがあります。ところが、ややこしいことに、ツメクサという植物がもう一つあります。帰化種ではなく在来の一年草で、漢字では爪草と書きます。早春から夏まで、庭にたくさん生える雑草ですので、ガーデニングの好きな人は目の敵にしていると思います。歩道の割れ目などでも、土が少しでもあれば生えてきます。

アカツメクサはムラサキツメクサとよぶのが正式なのですが、私は好みで別名とされるアカツメクサの方を使っています。やはりヨーロッパ原産の多年草で、明治時代のはじめに飼料作物として導入され、野生化しました。漢字では、赤詰草または紫詰草です。



左上：シロツメクサ 4月下旬 第2調整池

右上：四つ葉のクローバー（シロツメクサ） 3月下旬 本町地区
「幸運の印」なのだけど、何かいいことあったかな？

左下：アカツメクサ（＝ムラサキツメクサ） 7月中旬 第2調整池

右下：在来種ツメクサ（爪草） 4月下旬 7丁目

ところで近頃、第2調整池の土手に、草丈20～30センチほどの褐色の植物の群生が目立つようになりました。ヤセウツボです。ヨーロッパ原産で、昭和12年（1937）に千葉県で帰化が報告されました。葉緑素をもたないので、自身では光合成を行うことができず、もっぱら他の植物の根から養分を吸い取って成長します。ここの土手では、主としてシロツメクサに寄生しており、シロツメクサが悲鳴をあげています。どうにも好きにはなれない植物です。



ヤセウツボ
5月上旬
第2調整池

なお、すでになんらかの帰化植物を本連載コラムに載せております。参考のため、それらの帰化植物名をリストしておきます。

- | | |
|------|---|
| 第2回 | ヴィオラ・ソロリア |
| 第3回 | セイヨウタンポポ、ブタナ |
| 第6回 | アレチヌスビトハギ、シナガワハギ |
| 第7回 | キンガヤツリ、ユメノシマガヤツリ |
| 第8回 | オオケタデ |
| 第11回 | オオイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、フラサバソウ、コハコベ、オランダミミナグサ |
| 第13回 | ヤクナガイヌムギ、ハルガヤ、カモガヤ、ネズミムギ、ホソムギ |

2015 年
7 月
本吉 総男